

平成26年度 五泉市図工部 活動報告

部長 羽賀 三代（五泉市立五泉小学校）

1 活動のねらい

- ・ 個性的な表現を生み出す手立ての研修を深める。

2 活動内容

(1) 新津美術館作品鑑賞(6月)

「チェプラーシカとロシア・アニメーションの作家たち」の鑑賞

この展覧会は、ロシアの文化と芸術を紹介するイベント「ロシア文化フェスティバル in Japan」の一環であった。ロシアで人気の高い人形アニメキャラクター『チェプラーシカ』のスケッチや絵コンテ、人形やマケット（舞台装置）、映像、童話の挿絵原画など貴重な作品を展示し、キャラクター誕生からその変遷、アニメーション映画の創作過程などを多面的に紹介していた。また、ロシアの他の作家のアニメーションも一緒に展示していた。

この展覧会は、ロシアの文化や芸術に触れる機会となり、児童の鑑賞教材としても価値があると感じた。約300点の人形や絵は、童話を元にしたキャラクター『チェプラーシカ』が複数のアニメ監督によって描かれており、描き手による違いも楽しめた。作品は、構図や色合い、デッサンのすばらしさに学ぶところが多かった。児童の作品作りを指導する際に参考にしたい。

(2) 実技研修 人物の描かせ方、遠近法の指導の仕方(9月)

講師 山川 真知子 先生

生活の絵や物語の絵を題材として扱う際、児童に人物を描かせる指導に悩むことが多い。そこで、人物の描かせ方について、指導していただいた。

人物を描かせる際、指をしっかり描かせると、より様子が伝わる。実技研修では、関節を意識して、指のおり曲がり表現する描き方を学んだ。手のひらを四角にし、関節で句切って3つの丸でつなげ輪郭を描く、児童が取り掛かりやすい方法を知ることができた。

また、発達段階に合わせた題材もいくつか紹介してもらった。「低学年は、動物や人間など、手で触れることができるものを描くと生き生きとした表現ができる。中学年は、ショベルカー、ザリガニ、消防車と消防士など、動くものが適している。高学年は、校舎、遠近法を使ったものなど、じっくり見て描くものに集中して取り組める。作品を作るときには、児童のつまずきや指導の仕方がイメージできるので、教師が自分で描いたり作ったりすることが大切。」と話された。

遠近法の指導については、いくつかの見本をもとに、手前にあるものを細部までていねいに描かせるコツや構図の工夫の仕方について何うことができ、大変参考になった。



(3) 研究授業(10月)

- ア 題材名 光を通して
イ 題材の目標 光を通す材料を使って、色がいっぱいの世界をつくる。
ウ 授業者 渡邊 由紀子教諭 (村松小学校)
エ 授業の概要

本題材は、ローラーや刷毛、色セロハンなどを使い、長さ7mの大きなビニールシート上に光を通したときに美しく見える形や色を作る造形活動である。グループで「つくりたい光の世界」(テーマ)を決め発想や着想を交流させる場を設けてから作る活動を設定している。そして、作り終えた後は、振り返りで工夫したところを見つけ合うという活動が組まれている。

本時では活動の前に、用具の使い方や約束をみんなで確認し合った。面白さだけに走らないために、「宇宙の世界」「秋の世界」「海の世界」「お菓子の世界」「虹の世界」など班ごとのテーマを確認し、話し合いで決めた描きたいものを想起させていた。また、用具コーナーの設定やどのように描ける道具かが分かるような掲示物も用意されていた。

活動に入ると、まず子どもたちは、「僕は、地球を描く。」「私は、ロケットを描く。」「星は、ここ。」「太陽は端に。」と、だれが描くか分担し、画面構成を考えた。その後、ポスターカラーを混ぜて色を作り、大筆でどんどん描き進めていった。4～5人の学習班のどの班にもリーダーシップを発揮する子がいて、その子を中心に話し合いながら活動していた。

活動中、児童は「広いところをぬるなら、筆よりローラーがいいよ。」「セロハンってどうやって貼る?」「セロテープではればいいよ。」とアドバイスし合っていた。7mのビニールシートの端から端まで続く地面や波はローラーを使って一気に描いたり、ロケットの窓や海藻の部分に色セロハンを切って貼ったりするなど、学習経験を生かしながら生き生きと活動する姿が見られた。



本時に用意された7mのビニールシートのダイナミックさは、子どもの意欲を掻き立て、発想の自由さを確保できる場となった。雑巾ですぐに消せる安心感・材料や用具の十分な準備・班でイメージを共有し話し合いながら行う共同作業は、イメージを膨らませ、自分らしさを発揮しながら表現することにつながっていた。

材料とのかかわり、人とのかかわり、自分とのかかわりを促すことが発想を膨らませ、個性的な表現につながる支援となると感じた。

3 成果と課題

研究授業は、話し合いによる言語活動がイメージを共有し合い、想像を広げ、表現に生かすことにつながっていた。児童は、活動に没頭し自由に活動に浸る中で発想や着想や改造のすばらしさを味わい、創造性が育つ。児童の発達段階に合い、意欲を掻き立て、発想の自由さを確保できる題材を用意することの重要性を再認識させられた。

また、実技講習では、遠近法の描かせ方などをすぐに授業に取り入れることができ、作品作りに生かすことができた。